

魔法先生も異世界から来るそうですよ！

さとい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界を救った英雄ネギ・スプリングフィールドが逆巻十六夜と久遠飛鳥、春日部耀と共にノーネームを復興しつつ、箱庭で面白おかしく過ごしていく物語

問題児たちが異世界から来るそうですよ？と魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。

どうぞ楽しんでください！

(注)

ネギの性格が多少問題児よりです、それでも構わないという方はどうぞ

目次

目次

プロローグ

第1章くYES！ウサギが呼びました！く

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

1

4

10

15

18

24

30

34

41

44

48

目次 プロローグ

20×年

ネギ・スプリングフィールドが^{コスモ・エンテレケイア}完全なる世界残党を滅ぼした後、^{ムンドウス・マギクス}魔法世界を救うために開始した、100年計画、通称『BLUE MARS計画』の7年目、2年後に魔法を旧^{ムンドウス・ウエトウス}世界に発表することになったこの時期――

「ふう――、やっと成否のめどが立ったね」

「そうだね、これでようやく計画も第2段階に入ることができそうだよ」

ネギとフェイト・アーウェルンクスは休憩を兼ねて、麻帆良のとあるカフェテリアで今後のことについて話し合っていた。

「来年あたりには始められそうかい？」

「どうだろう、見た感じだともう3年はかかりそうだったよ。何しろ^{チャオ}超さんの技術は100年後の物だからね――」

「その100年後の技術の大半を扱えるようになった葉加瀬聡美には脱帽ものだね。彼女のおかげで技術面ではほとんど心配がいらなくなるんだから」

「そうだね、ところでこここの所なんだけど――」

「ああ、ここは――」

〃〃数時間後〃〃

「ん、こんなものかな？」

「そうだね、今日のところはこのくらいでいいんじゃないかな」
「それじゃあね、フェイト。そっちも大変だろうけど頑張ってるね」
「ネギ君も、頑張ってる」

そう言っつてフェイトが去った後、ネギもフェイトの向かった反対側の方向へ飛んで行った。

ネギは本拠に帰って書類整理をしていた。

これが終われば第2段階が始まるまで、当分仕事がなくなるからか、少し気合を入れていようにも見える。

「この書類は——、次のは——、ふう〜これで終わりかな

————よし終わっ

た〜♪」

そうしてネギは立ち上がりながら

「明日は師匠マスターのところに行っつて修行しようかな」

と言いながら立ち上がったその時、

「んっ？なんだこれ？」

足元に手紙が落ちていのに気づいた。

「んー？誰からだろう？——まあいいつか、中を見てから考えようっ」と

そうしてネギは疑問に思いながらも封を切った。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる
その才能ギフトを試すことを望むのなら
ば、

己の家族を、友人を、財産を、
世界の全て

を捨て、

我らの“箱庭”に來られたし』

「えーつと？世界や仲間を捨てる気はないんだけどなあ、ていうか箱庭ってどこだろう」

その瞬間手紙が光り出した。

「まずメア・ウイエルガ杖よ」

その光が転移系のものだと気付いたネギは杖を手元に呼び寄せた。次の瞬間、ネギ・スプリングフィールドはこの世界から姿を消した。

第1章くYES!ウサギが呼びました!く 第1話

「へ?」

ちよつと待つてなんていきなり空から落ちてるのオオオオ!

「キヤアアアア!」

「わっ!」

「さようなら、マイワールド!!?!!?」

こんにちは、ニューワールド!!?!!?」

此からは——ここが俺の世界だ——!!?!!?」

あ、他にも3人落ちてる——1人は礼装を着て赤い髪留めを付けている女の子。1人はスリーブレットのコートを着て猫を抱き抱えている女の子。最後の1人は制服を着てヘッドホンを頭につけて、おかしいこと叫んでる人——いや見てないで助けなと!

『モービリティ高速起動』

よし、あとは地上に降りれば大丈夫かな

※※

「まったく、信じられないわ!いきなり空に放り出すなんて!」

お嬢様といった格好の女性がいうと、

「右に同じだクソツタレ。そいつが助けしてくれなきゃその場でゲームオーバーだぜコレ」

いかにも不良です!といった格好の人が続く。

「そうね、さつきはどうもありがとう——ところで、あなたどうやって私たちを助けてくれたのかしら?」

んー?どうしよう、本当は魔法のことを教えちゃダメなんだけど—

——まあいつか、どうせ2年後に公表されるんだし。

「魔法で助けたんですよ」

『魔法!?!』』

うお、びつくりした。

「そうですよ。例えば——えっと魔法は後で見せるとで、先に自己紹介しませんか?」

「ええ、いいわよ。私は久遠飛鳥よろしくね。」

それで、そこで猫を抱きかかえているあなたは?」

「春日部耀、この子は三毛猫、よろしく」

「よろしくね春日部さん、それで、その野蛮そうなあなたは?」

「高圧的な紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶悪な逆廻十六夜です。粗野で凶暴で快樂主義と三拍子揃ったダメ人間なので、用法と容量を守った上で適切な態度で接しておくれお嬢様」

「そう、取扱説明書をくれたら考えてあげておくれわ十六夜君。——それで最後に、魔法を使って私たちを助けてくれたあなたは?」

「僕はネギ・スプリングフィールド。先程言った通り魔法使いですよ」
うん、3—A並に凄そうかな。

そんな僕らを物陰から見ていた黒ウサギは、

(うわあ———なんかお一人様を覗いて問題児様方ばかりなのですよ)

とか考えていたらしい。

※※

「ところでネギ君、さつき言っていた魔法って見ることはできるかしら?」

種類にもよるけど簡単なのならいいかな?

「いいですよ、どんな感じのがいいですか?」

「それじゃあいつまでたっても出てこないで、そこにいる奴をあぶりだせるようなのがいいな」

——十六夜君、それはちよつと可哀想じゃない? 多分僕たちが落ちつきすぎて出れなかっただけだと思うけど。

——まあ、当てなければ大丈夫かな。

「わかった、それじゃあ行くよ、

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル—光の精霊101柱集い来たりて敵を打て!!』《ケントウム・エト・ウーヌス・スピリトウス・ルーキ

ス・コエウンテース・サギテント・イニミクム》

サギタ・マギカセリエス・ルーキス
魔法の射手連弾・光の101矢」

「わっ!」

「すごいわね」

「ヤハハ! スゲエなこりゃ」

「へっ!? ——キヤアアア!」

おお、 やつと出てきた、 当たってないよね —— ってあれ?

「なんだこいつ」

「うさ耳?」

「コスプレ?」

って、 みんな睨まないの

「や、 やだな皆さん。 そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ? ええ、 ええ、 古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。 そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは1つ穏便にお話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「いや、 みんな少しぐらいは聞いてあげたら?」

「あっは、 取り付くシマもないですね」

(肝っ玉は及第点。 この状況でNOと言える勝気は買いです。 それにネギさんの魔法もなかなかのものでしたし。 まあ、 扱いにくいのは難点ですけども)

ん? なんだろう、 この視線、 値踏みされてるのかな?

って、 なんか不思議そうな顔した耀さんが黒ウサギさんの隣に立つ

て――

「えい」

「フギヤァ！」

あ、引っ張った。

「ちよ、ちよつとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きにかかるとは、どういう見ですか!？」

「好奇心のなせる技！」

「自由にもほどがあります！」

あ、今度は後ろに十六夜君と飛鳥さんが――

「へえ？このうさうさ耳って本物なのか？」

「――。じゃあ私も」

「ちよ、ちよつと待――！」

十六夜君も飛鳥さんもたのしそうだね。――その犠牲として黒ウサギのさん悲鳴が近隣に木霊してるけど。

※※

僕たちは黒ウサギさんの前の岸边に座り込み、とりあえず彼女の話を聞いてみようと思を傾けている。

「あ、あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス。」

「いいからさっさと進めろ」

だから脅さない、黒ウサギさん本気で涙目になってるじゃん。

「それでいいですか、皆さん。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言い『早く言え！』」

――うう、言いますよう。

ようこそ、『箱庭』の世界へ！」

おお、涙目だけどこらえた。

「我々は皆さんにギフトを与えられたものたちが参加できる『ギフト

ゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「YES!!?」すでに気づいていらっしやるでしょうが、皆さんは普通の人間ではありません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその恩恵を用いて競い合うためのゲーム。そして箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活するために作られたステージなのですよ！」

両手を広げて箱庭をアピールしてるけど——あのポーズ何回練習したんだろ。

「なあ、質問いいか」

十六夜君が軽薄な笑顔を消して黒ウサギさんに質問した。

「———どういった質問です？ギフトゲームのルールについてはこれから説明させていただこうと思っていたのですが」

「そんなものはどうでもいい。ゲームのルールは後で確認なりすればいいだけの話だ。俺が聞きたいのはたった一つ手紙に書いてあったことだ」

十六夜君は僕と飛鳥さん、耀さんを見まわし、巨大な天幕に覆われた都市を見てこう言った

「この世界は———面白いかな？」

他の2人も無言で返事を待っている。それもその筈、彼らを呼んだ手紙には

『家族を、友人を、財産を

世界の全てを捨てて箱庭に來い』

と書かれていたからだ。それに見合うだけの催しものがあるのか、3人にとって重要なことなのだろう。

でも、僕は———

「YES！『ギフトゲーム』人を超えたものたちが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたし

ます♪」

——元の世界に戻らなきゃなんだよなあ。

どうしよう、後で黒ウサギさんに聞いてみようかなあ。

第2話

あの後僕たちは、黒ウサギさんに箱庭についての説明やルールを聞き、黒ウサギさんの案内で、箱庭へと向かっている途中…

「なあネギ、今から世界の果てでも見にいかなえか？」

十六夜君がそんなことを言ってきた

「箱庭にはいかなくていいんですか？」

「いいんじゃないか？ どうせすぐ入ってすぐ帰って来ればいいんだし。あんだけデカイ天幕があれば迷うこともなさそうだしな」

「うーん…それもそうですね。それじゃあいきましょう♪」

あつ、そうだ

「飛鳥さん、耀さん」

「なにかしら？」「なに？」

「黒ウサギさんに『世界の果てまで行ってきます。暗くなる前に帰ります。』って伝えてもらってもいいですか？」

「ええ、いいわよ。面白い話があったら後で聞かせてちょうだいね」

「もちろん！それじゃあ行ってきますね…行こうか、十六夜君。」

「おう、了解だぜ」

そうして僕らは世界の果てへと向かった。

※※

僕らは、女性陣から離れて森林の中を移動している……が、

おかしい……、だって十六夜君普通の人間だよ!、僕みたいに瞬動を使ってるわけじゃなくて身体能力だけでそこまで速いって過ぎすぎない!?

「十六夜君ほんとに人間!? 恩恵があるからって早すぎない!？」

「これか？ どーにも俺のギフトの上澄みの効果らしいぞ」

「上澄みでそれっておかしくないかな!? どんな恩恵なんですか!!」

「ヤハハハ！ 俺もよくしらねえ。」

それよりもネギのその動きはなんなんだ？ どうにもよく分から

ねえんだが」

「これですか？これは瞬動って言って10mくらいの距離を一足飛びで移動する技ですよ」

「へえ、やっぱおもしれえな。今度どっかで勝負してえな………つと、ついたか？」

いつの間にか滝の麓に来ていたようだ。

少し霧もかかっている、探索するには男の子心をくすぐるちょうどいい環境になってる。

『ブクブクブク』

ん？なんか水面が泡立ってきたような…

『ゴゴゴゴゴゴ』

今度は地響きが…

『よく来たな小僧ども。我は【トリニスの大滝】に住む水神の眷属である。ぬしらに試練を与えてやろう、知恵か勇氣、どちらかをクリアすれば勝利としてやろう』

なんか蛇の数100倍ありそんな蛇が出てきたんだけど…なんか神様っぽい感じがするんだよねえ。

ていうか試練ねえ、どうしようか。

「十六夜君、どうする？」

「んー。今回は俺が行かせてもらおうぜ！

ー上から目線でどうもありがとよ。それじゃあ…テメエが俺を試せるかどうか試させてもらおうぜ！」

…十六夜君、いきなりお腹を蹴飛ばすのはどうかと思うよ。しかもなんで気や魔力で強化したりしてないのにあの巨体を吹っ飛ばせるのさ…

「この辺りのはず………」

「あれ、黒うさぎ……ピンクうさぎさん？」

「いえ、黒うさぎなのですよ！」

黒うさぎさんが現れた……髪をピンク色にして…

「もう、いったいどこまできてるんですか!?？」

「〃世界の果て〃まで来てるんですよ、っと。まあそんなに怒るなよ」
十六夜君が小憎たらしい笑顔で答えている。

「しかし黒ウサギさん速いですね。こんなに速く追いつけるとは思っ
てなかったですよ」

「むっ、当然です。黒ウサギは〃箱庭の貴族〃と謳われる優秀な貴種
です。その黒ウサギが……………（黒ウサギが半刻以上もの時間、
追いつけなかった……………）

あれ？急に黙っちゃった？

まあ、それよりも、

「ところで黒ウサギさんは何しに来たんですか？確か耀さんに伝言を
頼んだはずなんですが……」

「そ、そうでした。お二人様が無事でよかったです。水神のゲームに
挑んだと聞いて肝を冷やしたんですよ」

あ、

「水神？……………ああ、あれのことか？」

「へ？」

実は……

『まだ、まだ試練は終わってないぞ、小僧!!？』

「もう既に、十六夜君が喧嘩をふっかけちゃいました」

「なあ…なにをしてるんですか十六夜さん。って、どうしたらこんな
に怒らせられるんですか!？」

黒ウサギさんが啞然としてる。じゃあ顛末を話してあげましょう。

「えーっと、僕らが滝に着く↓水神が出現↓水神が試練を選べと行っ
てくる↓十六夜君が反論して『試せるのかどうか』試し始める↓十六
夜君が水神を蹴り飛ばす↓黒ウサギさんが来る↓現在。こんな感じ
ですね」

「まあ、そんな感じだな。結果は、まあ残念なやつだったが」

『付け上がるなよ人間風情が！我がこの程度倒れるか!!？』

水神が叫び、牙と瞳を光らせている。

「十六夜さん、下がって！」

「なに言ってやがる黒ウサギ、下がるのはテメエだろうが。この喧嘩は俺が売って、奴が買ったものだ、邪魔すんならまずテメエから叩き潰すぞ」

あれは邪魔したら本気で殺されるだろうなあ。黒ウサギさんも始まったゲームに手出しできないのを思いだしたみたいだね。

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる』

「はっ、寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

十六夜君、それは傲慢すぎないかい？水神も黒ウサギさんも呆れるよ。

『フーンーその戯言が貴様の最後だ！』

川の水が巻き起こり、水神よりも高い、竜巻く3本の水がまるで生き物のように、十六夜君に襲いかかる。

木々をねじり切るほどの威力の攻撃が十六夜君に当たる……

「ーはっーしやらくせえ」

わあお、あの威力の攻撃を、殴り飛ばすって……やっぱりおかしいんじゃないかな。

って、まだ一本残ってるじゃん。

避けたら……黒ウサギさんに当たるね。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステルリーメス・アエリアーリス風陣結界」

「嘘!？」

『馬鹿な!？』

「ま、中々だったぜオマエ」

竜巻を十六夜君が殴り飛ばしたら、水神と黒ウサギさんが安心して、そこに十六夜君が水神の胸元を蹴り飛ばした。

その衝撃で川が氾濫して、全身が濡れたんですけど……

「ああもう、服が濡れちゃったんですけど」

「ああ、悪かったな。クリーニング代くらいは出るんだよな黒ウサギ」
僕らが冗談を言いながら黒ウサギさんに聞くが、何か考え事をして

るせいで、いつこうに反応がない。

まあそれよりも

「ねえ黒ウサギさん？水神からギフトととかってもらえないんですか？十六夜君ゲームクリアだと思っくんですけど…」

「あ、そうでしたね。それでは今から水神様に聞いてきますね」

水神のところに行きギフトをもらえたようで大喜びの黒ウサギさん

「きゃーきゃーきゃー♪こんな立派な水樹の苗を貰いました！これがあればよそのコミュニティから水を買う必要がなくなります！みんな大助かりです！」

おお、喜んでる喜んでる、けど……

「十六夜君どう思う？」

僕が真面目な声音で聞くと

「ああ、ネギの考え、多分間違ってるないぜ」

「どうするの？」

「とりあえず黒ウサギの話聞いてから考えるだな。じやなきや判断のしようがない」

それもそうだね、

「お二人様見てください、こんな大きな水樹の苗をいただきましたよ！」

黒ウサギさんも戻ってきたし質問タイムと行こうか。

「ああよかったな黒ウサギ。だがひとつ聞かせてもらおうぞ。

黒ウサギ。オマエ、何か決定的なことをずっと隠してるよな？」

第3話

「黒ウサギ。オマエ、何か決定的なことをずっと隠してるよな？」

※

「—なんのことですか？箱庭やゲームのことはお話しすると約束しましたが」

「ちがうな。俺たちが聞いているのはお前たちのこと—いや、革新的な聴き方をするぜ。」

黒ウサギ達はどうして俺達を呼び出す必要があつたんだ？」

黒ウサギさんの動揺が目に見えてわかった。

黒ウサギさん達が意図的隠していたことだから。

黒ウサギさんが黙ったまなので十六夜君が続ける。

「これは俺の勘なんだが、黒ウサギ達のコミュニティは弱小チームか、訳あって衰退したチームなんじゃないか？だから俺たちはコミュニティの強化のために呼ばれた。」

そう考えれば今の行動や俺がコミュニティに入るのを拒否した時に本気で焦つてたのにも納得がいく——どうだ100点満点だろうか？」

十六夜君がこつちを向いてきた。僕も話せということかな？

「それで、その事実を隠していたのなら、僕達はまだ他のコミュニティに入れてしまうと思うんですが、その辺どうですか？」

「沈黙は是なり、だぜ黒ウサギ。この状況で黙り込んでも状況は悪化するだけだぜ。それとも他のコミュニティに入ってもいいのか？」

「や、だ、駄目です！いえ、待って下さい！」

「だから待ってるだろ。ほら、さっさと話せ」

十六夜君は川辺にあつた手頃な石に腰を下ろして、僕は立つたまま黒ウサギさんの話を聞こうとする。

「——話せば協力していただけますか？」

「ああ。面白ければな」

「話の内容次第では」

「わかりました。それでは黒ウサギもお腹をくくって、オモシロオカシク、コミュニティの現状をお話しさせていただきますいきましょう」

※

話を聞いたところ、黒ウサギさんのコミュニティは

・『名』と『旗印』が無く、『ノーネーム』という別称で呼ばれる
・中核をなす仲間が1人もいなく、122人中120人が10歳以下の子供

・これらは魔王によって起こされた

という状況らしい。もう壊滅状態だね。

というか、十六夜君が魔王の名前を聞いた時の反応がすごかった。だって、瞳が新しい玩具を見つけ子供みたいにキラツキラしてたんだもん。挙句にぶっ倒すとか言ってるし…バトル脳すぎる。

まあそれは置いて、黒ウサギさんにコミュニティの現状を聞いた後、十六夜君が『名』と『旗印』を新しく作ったら駄目なのか』と聞くと、黒ウサギは『可能だが、仲間達の帰ってくる場所を守りたい』と、傍目から見てもわかる本心からの言葉を口にした。

そして——

「茨の道ではあります。けど私達は仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニティを再建し——

何時の日か、コミュニティの名と旗印を取り戻して掲げたいのです。

その為には皆さんのような強力なプレイヤーに頼るほかありません。

どうかその強大な力、私達のコミュニティに貸していただけませんか！」

深く頭を下げてきた。

僕は少し考えた後、

「いいな、それ」

「いいですよ」

「——は？」

ありえないものを聞いたかのように、黒ウサギさんは2、3度聴き直してきた。

「え——あ、あれれ？　今の流れってそんな流れでございました？」
「まあそうですね。」

十六夜君達は、元の世界から抜け出したくて呼ばれたんです。『コミュニケーションを再建する』、そのくらいの目標があるくらいの方が楽しめるでしょうね。

それに僕も立派な魔法使いマジック・マスターを目指す為に困ってる人を助けるのは当然ですからね」

「そういうことだ、黒ウサギ。俺らはお前らに協力する。だからもつと喜べ」

十六夜君がそう言うと、黒ウサギさんの髪が薄いピンク色に変わり、へパア〜っていう擬音がつくぐらいの笑顔で、

「——はいっ！」

そう、いい笑顔で返事した。

「それじゃあ箱庭に行きましょう」

「YES！　これから箱庭に案内させていただきますのですよ♪」

第4話

日も暮れ始め、周囲が赤みを帯びてきた箱庭の噴水広場前に――
黒ウサギさんの説教が飛び交う。

「な、なんであの短時間に『フォレス・ガロ』のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状態になったのですか!」「しかもゲームの日取りは明日!」「準備している時間もお金もありません!」「一体どういう心算つもりがあつてのことです!」

「聞いているのですか3人とも!!?」

「『ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています』」

「だまらっしゃい!!?!!?」

まるで事前に打ち合わせでもしていたかのような言い訳に激怒する黒ウサギさん。

さて、黒ウサギさんがどうしてこんなにも激怒しているかということ
・黒ウサギさんと別れた2人はジン君の案内で箱庭に入り、今いる
『六本傷』のカフェテラスで軽食をとっていた。

・3人で楽しく会話をしていると、ピチピチタキシードを着た巨大な男、ガルドⅡガスパーが乱入してくる。

・ガルドはジン君のコミュニケーションの惨状を話し、自分のコミュニケーションに入るようにと勧誘してきた。

・しかし、飛鳥さんの恩恵ギフトの力でガルドが如何にしてコミュニケーションを拡大していったかを聞き出した。

が、なんでもへ相手の女子供をさらって脅迫し、旗印をかけたゲームに乗らざるを得ない状況を作った。そして、その子供達はもう殺したという最低最悪のやり方だった。

・そしてそれを聞いた飛鳥さんが、へコミュニケーションが瓦解するだけでは足りない、あなたのような外道は己の罪を後悔しながら罰せられるべきという思いから、『私たちと『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の『フォレス・ガロ』の存続と『ノーネーム』の誇りと魂を賭け

て、ね』と提案する

そうして現在黒ウサギさんが大激怒という状態に戻る。すると十六夜君が、

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思ってるかもしれないけど、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ?」

「まあ、確かに自己満足だな。時間をかければ立証できるものを、わざわざリスクを負って短縮させるんだからな」

「確かにそうね。でもね、私は道徳云々よりも、あの外道が私の活動範囲内で野ざらしになっていることも許せないの。ここで逃せば、絶対にいつか狙ってくるもの」

「僕もガルドを逃したくないと思ってる。彼のような悪人を野放しにしちゃいけないから」

黒ウサギさんは諦めたのか、

「はあく——。仕方のない人たちです。まあいいです。フオレス・ガロ」程度なら十六夜さんかネギさんが出れば楽勝でしょうし」

と喋ってきたが、

「何言ってるんだ? 俺は参加しねえよ」

「僕も今回は遠慮しようかな」

「当たり前よ、貴方達は参加させないわよ」

当然こうするよね。

「だ、駄目ですよ御3人様! コミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

十六夜君が真剣な顔で

「いいか? この喧嘩は、こいつらが売って、やつらが買った。なのに俺たちが手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」

「あら、わかってるじゃない」

「——。ああもう、好きにしてください」

丸一日振り回されすぎて疲弊したのか、黒ウサギさんは自慢のうさ

耳をへニヨらせて、がくりと肩を落とした。

※※

その後僕たちは黒ウサギさんの提案でギフト鑑定をする為に、ウザンドアイズ”と言うコミュニティに行くことになった。

商店に向かうペリベット通りは石造で整備されていて、街路樹には季節にあつた桜が満開に咲いていた。

すると飛鳥さんが不思議そうな顔で

「桜の木——ではないわよね？花卉の形が違うし、真夏になっても咲き続けるはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合いの入った桜が残ってもおかしくないだろ」

「え、何を言ってるんですか？今は春なんですから普通ですよ」

「——？今は秋だったと思うけど」

ん？僕らは顔を見合わせて首をかしげると、黒ウサギさんが笑いながら説明してきた。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。時間軸以外にも歴史や文化、生態系などところどころ違うところがあるはずですよ」

「へえ？パラレルワールドってやつか？」

「いや、多分ですが立体交差平行世界論じゃないですか？」

「ネギさん正解です。ただこれを説明すると長くなるのでまたの機会ということに」

お、どうやらお店に着いたみたいだね。

つと、ちようと割烹着の女性店員さんが看板を下げる場所だったようで——黒ウサギさんが滑り込みでストップを——

「まっ「まったなしですお客様。うちは時間外営業はやっていません」——」

——かけることもできなかったか。それにしても流石は大手商業コミュニティ、押し入る客の拒み方にも隙がない。

「なんで商売つ気のないお店なのかしら」

「ま、全くです！閉店前の5分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるなら他所へどうぞ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「出禁!?これだけで出禁とかお客様なめすぎでございますよ!?!」

「なるほど、箱庭の貴族”であるウサギのお客を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を行いますのでコミュニティの名前をよろしいですか?」

黒ウサギさんがどんどんヒートアップしていくが、店員さんの一言で言葉に詰まってしまふ。

「俺たちはノーネームっていうコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこのノーネーム様でしょうか?よかつたら旗印を認らせていただいても宜しいでしょうか?」

全員の視線が黒ウサギさんに集中する中、彼女は心底悔しそうな声で

「その——あの——私達に旗はありま『いいいいやほおおおお！久しぶりだ黒ウザギイイイ！』ってキャア——」

空中から飛来した白い物体は黒ウサギさんにぶつかり、そのまま用水路に転がり落ちていった。

「——おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか?」

なら俺も別バージョンで是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

十六夜君と店員さんは真剣な顔して何言ってるんだか…。

「白夜叉様!?どうしてあなたがこんな下層に!?!」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろうに!フフ、フホフホホ!やはり黒ウサギは触り心地が違うのう!ほれ、ここが良いかここが良いか!」

「し、白夜叉様!ちよ、ちよつと離れてください!」

って、白夜叉さんって呼ばれた人がこつちに縦回転で飛んでくる—

「ネギ、パース！」

「ゴバー！」

「ちよつと!? よつと、大丈夫ですか？」

まさか蹴り飛ばしてくるとは——

「う、うむ。おんしのお陰で助かったぞ。それにしてもおんし、飛んできた初対面の美少女を足で蹴り飛ばすとは何様だ！」

「十六夜様だぜ。以後よろしくな和装ロリ」

「僕はネギ・スプリングフィールドですよ」

「な、なに!? おんし今スプリングフィールドといったか!?？」

「え、ええ、そうですけど？」

「そうか、おんしが——」

スプリングフィールドに反応した？

——いやまさか、ね。

「あなたはこの店の人なの？」

「おお、そうだとも。このサウザンドアイズの幹部、白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼なら恩師のその年齢の割に発育の良い胸をワンタツチ生揉みで引き受けるぞ」

「オーナー。それでは売り上げが伸びません。ボスが起こります」

冷静な声で女性店員が釘をさしてきた。ちよつどその頃黒ウサギさんが濡れた服を絞りながら上がってきたところだった。

「うう——まさか私まで濡れることになるなんて」

「因果応報——かな」「ニャー」

「まあいい。話があるなら店内で聞こう」

「宜しいのですか？彼らは旗を持たない『ノーネーム』の筈。規定では

「『ノーネーム』だとわかっていながら名を尋ねる性悪店員に対する詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」——

少し拗ねたようにこつちを見てくる店員さんの前を通り、白夜叉さ

んの後に続いて僕たちはサウザンドアイズの暖簾をくぐった。

第5話

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」
店内に入った僕たちは白夜叉さんに連れられて、和室の部屋に案内された。

「さて、もう一度自己紹介しておこうかの。私は4桁の門、三三四五外門に本拠を構えている。『サウザンドアイズ』幹部の白夜叉だ。

この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になつております本当に」

黒ウサギさんの口調がだいぶ荒くなつて、一体いつも何をされてるんだか――

耀さんが小首をかしげながら白夜叉さんに質問する。

「外門ってなに?」

「箱庭の階層を示す外壁にある門のことですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つもの達が住んでいるのです」
なんでも此処、箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴つてそれぞれを区切る門には数字が与えられているらしい。

そして、外門は内側に行くほど数字は若くなり、同時に強大な力を持つつということだ。

「――超巨大タマネギ?」

「――何か違いますね」

「なら、超巨大バームクーヘンではないかしら?」

「そうだな。どちらかと言えばバームクーヘンだ」

そうかバームクーヘンか、なるほど――

「ふふ、うまいこと例えおる。その例えなら今いる7桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分にあたるな。更に説明するなら、東西南北の4つの区切りの東側にあり、外門のすぐ外には『世界の果て』

と向かいおる場所になる。

彼処にはコミュニティに所属はしていないものの強力なギフトを持ったもの達が住んでおる。

例えばその水樹の持ち主などな——

——して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？知恵比べか？勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんが蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

「なんと!??ゲームクリアではなく直接倒したとな!??ではその童は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそうは思いません。神格なら一目見ればわかるはずですし」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほどのパワーバランスがある時だけのはず。——蛇と人ではどんぐりの背比べなのだが」

なんでも神格というのは、生来の神様そのものではなく、種の最高ランクに体を変幻させるギフトを指すらしい。

そして、神格を持つと他のギフトも強化されるから、箱庭のコミュニティは各々の目的のために神格を手にするのを第一目標にしているというだ。

ていうかそれよりも、

「白夜叉さんはあの蛇神さんと知り合いなんですか?」

「うむ、なにせアレに神格を与えたのはこの私だからな。もう何千年も昔の話だな」

「へえ?。じゃあオマエはあの蛇より強いのか?」

「ふふん、当然だ。私は東の『階層支配者』だぞ。この東側の4桁以下にあるコミュニティでは並ぶものがない、最強の主権者^{ホスト}なのだから」

あつ、そんなこと言ったら——

「そう——ふふ。ではつまり、あなたのゲームをクリア出来れば、私たちのコミュニティは東側で最強のコミュニティということになるの

かしら?」

「無論そうなるのう」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」

こうなるよね。もう少し相手の実力を凶れるようになってくれると僕も心配が減るんだけど——

「え、ちよ、ちよつと御三人様!?!?」

「よい、黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えてる故な。それよりもネギ、おんしはやらんでもよいのか?」

「ええ、想像通りだとしたら流石に準備が——」

絶対すぐには終わらないだろうし、被害が尋常じゃないことになるからね

「ふふ、そうか。まあよい——。さておんしら、ゲームの前に一つ確認しておくことがある」

すると白夜叉さんが袂から「サウザンドアイズ」の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し一言告げてきた、

「おんしらが望むのは「挑戦」か——もしくは「決闘」か?」

白夜叉さんが言った直後、僕らの周りに爆発的な変化が起こった。

白い雪原と凍る湖畔——そして、水平に太陽が回る世界に僕らはいた。

「——なっ!?!?」

あまりの異常さに、十六夜君達は息をのんだ。

啞然として立ち竦む三人に、白夜叉さんが問いかける

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は「白き夜の魔王」——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への「挑戦」か? それとも対等な「決闘」か?」

「水平に回る太陽と——そうか、白夜と夜叉。あの水平に回る太陽やこの土地は、オマエを表現してるってことか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の一つだ」

さて、この圧倒的な実力差でどんな返答をするのかな

「——参った。やられたよ。降参だ白夜叉」

「ふむ？ それば決闘ではなく、試練を受けるということか？」「ああ、これだけのゲーム盤を用意できるんだからな。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

十六夜君の可愛らしい意地の張り方に、白夜叉さんが腹を抱えて哄笑を上げた。

一頻り笑った後、白夜叉さんは

「く、くく——して、他の童達も同じか？」

「——ええ。私も試されて上げていいわ」

「右に同じく」

ふふ、良かった良かった、さすがに決闘って言ってたら止めなきやだったからね

「も、もう！ お互いに喧嘩をする相手をもう少し選んでください！

“階層支配者”に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う“階層支配者”なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前のことじゃないですか!!？」

「何？ じゃあ元・魔王様つてどこか？」

「はてさてどうだったかな？ とこれでネギ、おんしには決闘を受けてもらいたいんじゃないか？」

「なぜですか？」

みんなと一緒に挑戦でいいんだけど、

「いやなに、ナギ・スプリングフィールドの息子の実力が気になっての」

「まさか、父さんもここにきたことがあるんですか」

「ああ、と言つても三年ほどじゃったがの。確か紅き翼アラルブラといったコミュニティを作っておったの」

「なんと！ ネギさんのお父様は、あの紅き翼アラルブラのナギ・スプリングフィールド様だったのですか」

まさかホントに来てるとは。

ていうか父さんは一体なにしたのさ？

「そのナギさんと紅き翼アラルブラは何をしていたのかしら？」

「まずアラルブラ紅き翼ですが、このコミュニティは対魔王を掲げ黒ウサギ達のコミュニティと同盟を結んでおりました。

コミュニティはリーダーのナギ・スプリングフィールド様、そしてアルビレオ・イマ様、近衛詠春様と三人だけでしたが、個人の戦闘力が非常に高く、特にナギ様は魔王側からは【赤毛の悪魔】と恐れられる程でした」

「「「すごっ!!?!?!?!」」」

素で4人の声が揃うほど驚いたよ。ていうか、まさかそんなことしてたなんて。

「まあ、そういうわけでの。ネギ、おんしの力が見てみたいんじゃが良いか?」

ん、まあ僕の方も試してみたいからいいかな

「わかりました、『決闘』、受けさせてもらいます。」

「うむ、良い返事じゃの」

そんなことを話していると、山脈の方から甲高い鳴き声が聞こえてきた。

「ふむ、あやつか。そうだの、おんしら3人にはこのゲームに挑戦して貰おうかの」

そう言うときと白夜又さんは双女神の紋が入ったカードを取り出した。そしたら虚空から光が輝く羊皮紙が現れて、そこにゲーム内容を記述していった。

【ギフトゲーム名 鷲獅子の手綱】

・プレイヤー一覧

廻 十六夜

逆

鳥

久遠 飛

耀

春日部

・クリア条件

グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法

“力” “勇気” “知恵” の何れかでグリフォンに認められる。

・敗北条件

降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓

上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します

“サウザンドアイズ”印】

「私がやる」

第6話

「私がやる」

※※

箱庭で最初に全員で挑むギフトゲーム。先陣を切ったのは、一見大人しそうに見える耀さんだった。

「ふむ。自信があるようだが、これは結構な難物だぞ？ 失敗すれば大怪我ではすまんが」

「大丈夫、問題ない」

おお、耀さんの目がキラツキラ輝いてるように見えるよ。

「OK、先手は譲ってやる。失敗すんなよ」

「気をつけてね、春日部さん」

「うん。頑張る」

耀さんが参加することに決まったようだね。

「頑張ってるね耀さん、応援してるよ」

「うん、ありがとう」

僕らが激励の言葉を聞いた後、耀さんは待ちきれないといった様子で走って行った。

その後、耀さんはグリフォンと言葉を交わし、「誇りをかけて勝負をする」という提案を出した。それに対しグリフォンは「誇りの対価に何をかける」と聞くと、耀さんは誇りの対価に命をかけた。

さすがにこの時は傍観に徹していた飛鳥さんや黒ウサギさんも、耀さんを止めようとしていたが、白夜叉さんと十六夜君に止められていた。

その後、グリフォンの背中に乗った春日部さんはなんとか山脈を一周し、湖畔へ戻ってきてゲームクリアとなった。が、勝利が決定した瞬間、春日部さんが突如グリフォンの背中から落ちた。

僕は空を飛んで助けようとしたが、十六夜君の言葉を聞いて少し様子を見てみた。すると、春日部さんの体が風をまとって宙にき、そし

て、階段を下りるように僕らのところに戻ってきた。

「やつぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特徴を手に入れる類だったんだな」

「違う——。これは友達になった証。けど、いつから知っていたの？」

「ただの推測。お前、黒ウサギと出会ったときに『風上に立たれたらわかる』とか言ってたろ。そんな芸当はただの人間にはできない。だから春日部のギフトは他者とコミュニケーションをとるだけじゃなく、何らかの形で手に入れる類のものだと推測したんだが——」

「どうやらそれだけじゃないみたいだな。あの速度に耐えられる動物はいないだろうし？」

十六夜君が面白そうなものを見つけた顔をしてると、パチパチと拍手を送る白夜叉さんと、グリフォンやってきた。

《見事。お前が得たギフトは、私に勝利した証として使ってほしい》

「うん。大事にする」

「いやはや大したものだ。このゲームはおんしの勝利だの。——とところで、おんしの持つギフトだが、それは先天性のものか？」

「ううん、父さんにもらった木彫りのおかげで話せるようになった」

「木彫り？」

《お嬢の親父さんは彫刻家やつとります。親父さんの作品のおかげで僕らとお嬢は話せるんや》

「ほほう、彫刻家の父か。よかったらその木彫りとやらを見せてくれるか？」

「こくりと頷いた耀さんから木彫りを貸してもらおう。僕も興味がある。」

「複雑な模様ね、何か意味があるの？」

「意味はあるけど知らない。昔教えてもらったけど忘れた」

「えーっと。楠でできていて、この模様は系統樹かな」

「おそらくの、ならこの図形はこうで、この円形が収束するのは

——いや、これは、これはすごい！本当にすごいぞ娘!!？」

本当に人造ならおんしの父は神代の天才だ！まさか人の手で独自

の系統樹を完成させ、しかもギフトとして確立させてしまうとは！

これは正真正銘『生命の目録』と称して過言ない名品だ！」

「でも母さんの作った系統樹の図はもつと木の形をしていたと思うけど？」

「うむ、それはおんしの父が表現したいモノのセンスがなす業よ。

この木彫りをわざわざ円形にしたのは生命の流転、輪廻を表現したもの。再生と滅び、輪廻を繰り返す生命の系譜が進化を遂げて進む円の中心、即ち世界の中心を目指して進む様を表現している。中心が空白なのは、流転する世界の中止だからか、生命の完成が未だに見えぬからか、それともこの作品そのものが未完成の作品だからか。

うぬぬ、凄い。実に凄いぞ。久しく想像力が刺激されてるぞ！実にアーティスティックだ！

おんしさえよければ私が買い取りたいくらいだの！」
「ダメ」

耀さんに即答されて、白夜叉さんがお気に入りのおもちやを取り上げられた子供みたいにしよんぼりした。が、すぐに立ち直った。

「まあ仕方ないかの。それよりもネギ。準備はできておるかの？」

「いよいよか、精霊だしなあどれだけの力なんだろう。」

「大丈夫です。宜しくお願いします！」

「それでは開始するぞ。黒ウサギ、審判を頼むぞ」

「YES！ お任せください」

【ギフトゲーム名『白夜の試練』

・プレイヤー一覧

ネギ・スプリングフィールド

・クリア条件

白夜の星霊『白夜叉』に力を認められる。

・クリア方法

白夜叉に力を認められる。

・敗北条件

プレイヤーが、降参、または上記の勝利条件を満たせなくなった場

合

宣誓

上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印】

「それでは、ゲーム開始なのです！」

第7話

「それではゲーム開始なのです!」

※※

さて、白夜叉さんとゲームをすることになったんだけど——白夜の「精霊」じゃなくて「星霊」らしい。

それで星霊は箱庭の中でも最強種に位置するらしく、その中でも白夜叉さんは本来なら2桁の外門に所属しているらしい。

どのくらいすごいかというと、比較対象で父さんたちアララルブラ紅き翼は3人の力ですら4桁の外門までしか上り詰めることができなかつたらしい。

——いや、3人でそこまで行くのも凄いなだけだね。

——まあ、何が言いたいかと言えば、

「エーミツタム・エト・スタグネット解放・キーリブル・アストラベ固定!! 『千の雷』!」

マギエ・エレベア闇の魔法使わないと即やられるってことだ。

「コンプレクシオー掌握!!プロ・アルマテイオーネ術式兵装

「ヘー・アストラベ雷ヒューベルウーラヌ・メガ・デユナメネ天 大 壮!!」

「——行きます!」

「うむ、初手は譲るぞ」

初撃を譲ってくれるらしい。なら、まずは視覚に雷速瞬動で入って一撃入れようかな。

「エーミツタム解放・サギタ・マギカ魔法の射手・コンウエルゲンティア・フルグラリス雷の千一矢

雷華崩k——『ふむ、やるの』——なっ!」

「——ゴフ!」

痛っつ!

「カカツ、惜しかったの。まさかおんし自身が雷化するとは思わなかつたわ」

いや、確かに何度がやれば迎撃はされるところだ。

でもさ、ラカンさんでも初見でまともにくらったものを、完全に見切ってカウンターして来たんだよ！

ほんとに一筋縄じゃ行かないか。

「さて、面白いものを見せてもらった礼じゃ、耐えて見せよ」

さて、白夜叉さんが両手に熱いや、火かな。分かりにくいけど何かを集め始めたけど——あれだね、やばい感じしかない。何とかでも止めないと

ベルフェクトウス・ブラスマティオーニスベル・エーミツシオーネム
「術式 解放 完全 雷化

チハヤブルイカズチ
『千磐破雷！』

行けるか——

「惜しかったの『紅炎』」
プロミネンス

※※

「——ツハア、ハア」

「ほう、回避しよったか」

ふむ、結構大規模に打ったんじゃが、ほとんどダメージはなさそうじゃの。

それにしても自身の雷化か、魔法使いとはいえベースは人間のはず、精霊を宿すとかならばともかく雷化など聞いたことないのだが。

まあ、それを置いておいても凄まじいの。これで17歳など信じられん。少なくとも個人戦力として5桁、もしやすると4桁にまで届くやもしれんの。

「——よしっ！行きます！」

ふむ、考えはまとまったようだな。

「うむ、全力で来るがよい！」

シニストライー・エーミツサ・スタグネット キーリブル・アストラペー
「左腕解放 固定 『千の雷』」

デクストラ・エーミツサ・スタグネット キーリプル・アストラペー
右腕解放固定 『千の雷』!!

ドワフレクス・コンプレクシオー
双腕掌握

フロ・アルマティオーネ タストラバー・ヒューベル・ウーラヌー・メガ・デユナメー
術式兵装 『雷天双壮』

む、これは

「——ホッ、ヨッ、ハアッ! くく、なるほど常時雷化か!」

なるほど、これならば先のような先行放電を出すこともない。さ

らに思考も上がるといったところか、一石二鳥だの。

「なるほど、なかなかやるの! これ最後まで 『氷瀑』」

広範囲殲滅系じゃ、逃げ場はない。おんしはどうする。

※※

『術式兵装、雷天双壮』

…なんだあれ。

「おい黒ウサギ、何がどうなってるかわかるか」

「確証はないのですが、見た感じだと自身の雷化かと思われま

す。雷化か…それを瞬動とやらと組み合わせて使ってるわけか。

にしてもずっと光ってるせいか目が痛い。

「ねえ、十六夜君は見えるの? 私には周辺がずっと光ってて何が

何だか分からないのだけど」

「(——コクコク)」

「いや、俺も全部が全部見えてるわけじゃないぜ。黒ウサギはどうだ」

「黒ウサギもギリギリですね。ネギさんの雷化も想像の域を出ません

ので」

「そう。ちなみに今どんな感じか分かるかしら?」

「そうですね、先程から近接戦闘を主体に戦っています。

…なんで白夜叉様は素手で雷と対峙できるのでしょうか」

言われてみれば確かに

ああ、どっかでネギと戦ってみてえな。

「——これで最後じゃ 『氷瀑』^{アイス・フオール}」

お、これが最後か——つてどうすんだこれ。

※※

「——これで最後じゃ 『氷瀑』^{アイス・フオール}」

あれはまずいかな。しかも範囲が広すぎて逃げ場もないし、迎撃しない

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、契約により我に従え高殿の王、来たれ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷帝、百重千重となりて走れよ——」

これで！——ん？寒気がs

「ハックシユン！」

「なっ!? (啞然)」

あ、ヤバ。

つて、地面にぶつかる——

「——ツいてて。ハッ、白夜叉さんは!?!」

「おー、ここじゃよー」

埋まってる!?!

「だだだ、大丈夫ですか!?!」

「大丈夫じゃよ。ダメージも特にないでの」

ホッ、良かった。

「すみません。どうにもクシヤミをすると魔力が暴走してしまっ
て……」

「ふふ、良い良い。それと面白いものも見れたでのゲームはクリア
じゃよ」

あ、契約書類が……うう、なんか納得がいかない。

「そう落ち込むでない。それにそろそろあ奴らも来るだろうしな」

ああ、十六夜君たちかな

「おーい今のなんだったんだよ。見た感じネギが雷になったように見えただよ」

「その通りですよ。魔法で僕自身が雷化できるようになってるんです」

「雷化って…魔法ってホントすげえな！——ツと、お嬢様たちも来たか」

あ、ホントだ

『ネギ（君／さん）すごい！——』

おお、いっぺんに喋られても分からないだけだな。こういうのは麻帆良で慣れたと思ってたんだけど。

「これこれおんしら、その変にしておけ。さて、ギフトゲームをクリアーしたおんしらには「恩恵^{ギフト}」を与えねばな。して、何が良いか」

「あ、でしたら「恩恵」の鑑定をお願いしたいのですが」

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。私にとって専門外どころか無関係なのじゃが——そうじゃ、良いものがあつたわ」

そう言つて白夜叉さんが柏手を打つと僕らの前に光り輝くカードが現れた。

十六夜君にコバルトブルーのカードが。

飛鳥さんにワインレッドのカードが。

耀さんにパールエメラルドのカードが。

そして僕の元にはホワイトのカードが。

そして表面には僕の名前と、ギフトネーム「魔法使い」 不老不死

”

僕らがカードを受け取り眺めていると、黒ウサギさんが驚いたような顔でカードを覗き込んできた。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「じゃあパクティオーカード？」

「ち、違います！というかなんで皆様そんなに息があっているんですか?!しかもネギさんに至っては『じゃあ』って何事ですか!」

いや何となく乗った方がいいかなと思ってね。

「で、結局これは何なんだ？」

「全くもう。これはギフトカードと言いまして、顕現しているギフトを収納することが出来るのですよ！」

耀さんの「生命の目録」やネギさんの持っている杖なども収納出来るのです!」

「ふーん。つまり素敵アイテムってことでオツケーだな」

「だから何でそう適当に流すのですか!」

2人のやり取りを見てた白夜叉さんが笑いながらギフトカードの説明をしてくれた。

「そのカードは正式名称を『ラプラスの紙片』という。そこに刻まれるギフトネームはおんしらの『恩恵』の名称だ。」

「ふうん。じゃあ俺のはレアケースだな」

「なんじゃと?」

そう言つて白夜叉さんに釣られ、僕達も十六夜君のギフトカードを除きみる。

そこにはギフトネーム「コード・アンソウン 正体不明」と書かれていたけど、全知ですら分からないギフトネームっていったい。

「そんな馬鹿な」

実際白夜叉さんが不可解な目で十六夜君を見てることから、この箱庭でも異常なことなんだろう。

※※

その後僕達はサウザンドアイズを後にし、ノーネームの居住区画にたどり着いていた。

そして魔王との戦いの名残を呆然と眺めていた。

僕らが見たノーネームの光景は、人工物を何百年もの間放置して置いたように見えるほど酷く崩れ去っていたからだ。

「……………おい、黒ウサギ。魔王のギフトゲームがあつたのは———今から何百年前の話だ？」

「僅か三年前のことです」

「ハッ、そりや面白いな。いやマジで面白いぞ。この風化しきつた町並みが三年前だと？」

十六夜君はそう言って目の前にある木材を軽く掴むが、ボフンツと言った感じで壊れてしまった。

「魔王か———」。ハッ、いいぜいいぜいいなオイ。想像以上に面白そうじゃねえか！」

第8話

廃墟を抜け、貯水池で水樹の苗を設置し、子供たちと顔合わせをした僕らは、コミュニケーションの本拠である屋敷の中に入りそれぞれに宛てがわれた部屋を物色したあと、来賓用の貴賓室で軽く雑談をした。

そしてある程度話をしていると黒うさぎさんから湯殿の準備が出来たと声がかかった。

「それじゃあ二人とも、先に入らせてもらおうね」

「ああ、構わねえよ。俺は二番風呂の方が好きなんでね、ネギもいいだろ?」

「うん、構わないよ。僕らのことは気にせずゆっくりとどうぞ」

「ありがとう。いきましょ、春日部さん」

「うん」

——人とも充分離れたかな。

「さて、僕はどうする?」

「ま、今回は俺一人でもいいさ。軽く潰してくるよ」

十六夜君は外の：多分フォレスガロの方に行ったようだし、気配をほぼ完全に隠してる方に行こうかな。

フォレスガロの人たちがいるのとは正反対の窓から飛び出して屋根の上に行くと、一人の少女が座っていた。

※※

「ふふ、ガルドには鬼種の恩恵を与えた。これで試せると良いのだが」「いったい何をかな」

その言葉に私は驚きつつも振り返ると、身の丈ほどある杖に乗って浮いている——確かネギという少年がいた。

「で、どちら様でしょうか吸血鬼さん。場合によつては——」

私の種族に気づくか、完全に隠していると思ったのだが。

「警戒させたのなら謝ろう。私はレティシアードドラクレア、ノーネームの元メンバーだ。ところで君はさつき私の種族を当てたな、なぜ分かったのだ？」

「ただ、僕の師匠が吸血鬼で、その気配とかが似ていただけですよ。で、その元メンバーが何用で？」

「いや何、黒うさぎが新しいメンバーをコミュニティに加えたと聞いてな。少し実力を確かめなくなったのでな」

「なにせあの白夜叉の前で打倒魔王何て話すのだ、最終目標はノーネームの復活だろう。」

「ただ、その為にはあの時の魔王を打倒しなければならぬ。」

「その実力もなければ止めるしか無いのだから。」

「なるほど、僕らの実力を確かめに来たってことですか」

「どうやらある程度の警戒は解いてくれたようだな。」

「しかし、迂闊に動けば、いつでも襲えるように構えているか。」

「それで、どうしますか」

「いや、今日は遠慮しておく。また明日来させてもらうよ」

「分かりました、それでは僕も失礼しますね。ちようど下も終わったようなので。それではまた明日」

ふう、行ったか。それにしても流石はナギの息子といったところか。ネギに関しては白夜叉と張り合えるらしいから問題は無いだろう。後は三人を見極めれば良いのだがな。

「さて、私も御暇させてもらうよ」

※※

「ふう、やっと行ってくれたか」

それにしても吸血鬼の真祖——いや、あの感じだと純血種のほうか、とにかく吸血鬼が出てくるとは思わなかったな。ただどうにもバランスが取れてないように感じる気がする。まるで元々の力が無くなった、みたいな感じで。

「よ、ネギどうしたんだ、考え事か」

十六夜君がいつの間にか正面に。ちよつと考えすぎたかな。

「ちよつと考え事をね。それよりも十六夜君はどうだったの？」

「俺の方は、そうだな。簡単に言えば、あいつら潰して、打倒魔王宣言して、明日に向けておチビに発破をかけたぐらいかな」

「打倒魔王——ああ、ネームバリユーカーかな」

「ま、そういうこつた。さ、さつさと風呂に入っちゃまおうぜ、お嬢様たちをさつき見かけたからもう問題ないだろしな」

「賛成。ついでにこれからの事でも話そつか」

十六夜君の目的はガルドに奪われた旗の返却と打倒魔王宣言でノーネームの名前を売ること。

ただ、時を操るかのような恩恵を持つ魔王を打倒するには相当の手練が必要だ。

となるとさつきの吸血鬼には戻ってきてもらいたいものだけど——訳ありつぽいしなあ。

「おい。ネギー、行くぞー」

ま、どのみちこの考えは机上の空論。

だったら今は、

「うん、今いくよ」

黒うさぎさんの言っていた大浴場を楽しませてもらおうかな。

第9話

ガルド戦…は原作通りなので割愛。

…原作ってなんだろう？…まあ、いいか。

それで、耀さんが右腕に怪我を負い、それに関して来るであろう彼女を僕は屋敷の屋根の上で待っている。

お、やっと来たかな。

「やはり待たせたようだな、すまない」

「いえ、今来たところなので」

「…何も言わないのだな」

「そうですね。確かに耀さんが怪我をしましたが、そうなる要因を対策しなかった僕にも責任はあるので、レティシアさんだけを攻めるのは筋違いかと」

「そうか。ならば後で直に謝ろう。中へ入れてもらってもいいか」

「もちろん。黒ウサギさんとジン君、十六夜君、飛鳥さんが待っています。中へどうぞ」

※※※

黒ウサギside

「お待たせてしました、主犯の方が来ましたよ」

ついに来たようですね。黒ウサギの同士を傷つけるなんて、絶対に許さないのですよ！

「ようやく来たのですか！黒ウサギの同士をよくも…って、レティシア様!？」

え!?なんでレティシア様がここに!?

「ふふ、久しいな黒ウサギ、ジン」

「やはりあなたでしたか、レティシアさん」

え、ジン坊ちゃんは気づいてらしたのですか!?

「ジン君彼女は誰かしら?」

「彼女の名前はレティシアⅡドラクレア。箱庭の最強種の1種、純血の吸血鬼であり、元魔王、そして何より元ノーネームのメンバーの1人です」

「紹介に与ったレティシアⅡドラクレアだ。今回は傷ついた彼女への謝罪に来た」

「今回のギフトゲームではガルドの屋敷及びガルド自身が鬼化するとということが起こりました。それはレティシアさんが鬼化させたためでしょう」

なるほど、だからガルドが鬼化していたのですね。しかしなぜレティシア様がこんなことをしたのでしょうか。

「…なるほど、俺らの力を試すってところか」

「その通りだ。白夜叉からノーネームに新たな人材が入ったと聞いた、そしてコミュニティの復活を目指すともな。故に私は見極めなければならなかった」

「そしてガルドを当て馬にしたと。で、結果は？」

「悪いがまだ判断できない。娘2人は青い果実、十六夜はゲームにすら出ていないからな」

だからレティシア様はあのようなことをしたのですね。

「そうか…だがそれなら話は早い。お前自身が力を試しに来ればいい」

はい？今なんとおっしゃいました？

「ふ、ふふふ、そうだな。最初からそうしておけば良かったな」

「だろ。んじや早速やるか」

ちよ、お二人共何を…

「やり方は？」

「ランスを互いに投擲しあい、受け止められなければ負けだ」

「OK、んじや早速やろうか」

「ちよ、待つのですよ！」

ああ、行ってしまったのですよ…

※※※

「へえ、吸血鬼は空を飛べるのか」

「そうだが、不満か？」

「いや、ただの興味だ」

そろそろ始まるかな。

「うう、お二人共お」

「2人とも頑張つて！」

黒ウサギさんはぐったり、飛鳥さんは応援と。

「さて、始めようか」

レティシアさんがギフトカードからランスを取り出して構える。

「行くぞ」

レティシアさんの投げたランスは上空からの落下速度も合わさつて隕石のように堕ちてくる…あ、摩擦熱で火が付いた。

さあ、十六夜君はどうするのかな。

「ハッ！しゃらくせエー！」

ちよつと待とうか。なんで素手で殴りに行くのかな。そしてなんで素手で燃えるランスを碎けるのかな。

つて、レティシアさんも啞然として回避行動できてない!?

まずい、瞬動で！

「気持ちばかりですけど、勝負の最中に惚けてはダメですよ」

「ハッ！ す、すまない。流石に理解が追いつかなくなったぞ」

大丈夫です、みんなそうです。現に黒ウサギさんも飛鳥さんもポカンとしてるし。

「で、どうだったよ元魔王様。これで十分か」

「あ、ああ、しかし物凄いな、いったい十六夜のギフトは…『いたぞー！』
まずい奴らか！」

何事!?

振り向くと視界いっぱい光が…つて、当たってたまるか!!

「ネギ大丈夫か!？」

「ギリギリ…いや、左腕に当たったよ、左腕は使えないかな。レティシアさんは大丈夫だよ」

危なかった。左腕だけだったから魔力抵抗で止められたけど、全身に食らってたら…

「そうか、あいつらを撃ち落とせるか？」

「任せてよ」

十六夜君が僕らの前に立つ。

「奴ら石化してないぞ！2発目だ！」

「おい、テメエらのせいで今機嫌がすごい悪いんだよ。覚悟はいいよな！」

「なんだとノーネームの分際で！お前ら2発目だ！」

今度は余裕があるから避けられるけど…あ、十六夜君がめで任せろと。

「しやらくせエ！」

本日2度目！いや、ふざけてるわけじゃないんだよ。だって石化系の光線を蹴り砕くのを見てどう反応しろと？

「な、馬鹿な!？」

「ネギ今だ！」

了解！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、『魔法の射手・連弾・雷の17矢』サギタ・マギカ セリエス フルグラリス

雷の矢、今回は雷の麻痺を付与。

「ゴハッ！」

撃墜成功つと。

第10話

コミュニティ「ペルセウス」。このコミュニティはサウザンドアイズの傘下のコミュニティの一角だそうだ。これを聞いた僕たちは、白夜叉さんにことの詳細を聞き出すためにサウザンドアイズへ乗り込んだ。

まあ僕は怪我をしてまだ眠っている状態の耀さんと、追われているレティシアさんと一緒に、ペルセウスの人の見張りとホームの防衛をしているけど。

「すまない、君たちには迷惑かけるな」

「大丈夫ですよ。いずれ仲間になるんですから、ついでにリリちゃんたちにもあつて行きますか？」

「いやノーネームの一員ではないのだ、やめておこう。どのみち戻つて来られるかはわからないからな」

十六夜君ならなんとかしてレティシアさんをノーネームに戻せるように動きそうだけどね。ただギフトゲームで所有権を獲得とかになるとは思うけど、相手に乗ってくるとは限らないしなあ。

「レティシアさん、ペルセウスの人にゲームを仕掛けることつてできないかな。出来れば強制できて景品がこつちで決められるようなものがあればいいんだけど」

そんな相手にとつて都合のいいゲームがあるとは思えないけど。

「ない事は無いな、たしか先代の当主が下位コミュニティに向けたゲームがあつたはずだ。それをクリアすれば挑戦権が得られるはずだ。とはいえペルセウスに挑戦するためのゲームなため相当な難易度と聞いてはいるが」

あるんだ。難易度にもよるけど十六夜君に相談してみてかな。

「ちなみに内容は分かりますか？」

「すまない、2つのゲームをクリアすれば挑戦権を得られることは知っているが内容までは…」

それならしょうがないかな。それにゲームが2種類あることが知れただけでも収穫だ。

とりあえずはサウザンドアイズ組を待つてから行動かな。白夜叉さんからペルセウスに交渉権を貰えればそれにこしたことはないし。

※※

サウザンドアイズへ行つた4人が戻つてきた。が、3にんの顔は不満でいっぱいといった顔だった。そして何故か黒うさぎさんに外出禁止令が出されていた。

詳細を聞きたいけど飛鳥さんは怒つてるし、黒うさぎさんは悲痛そうな顔をしてるし…

「十六夜君、ちよつといい？」

「おお、いいぜ」

僕は女性陣に聞かれないようにするために最上階の部屋に十六夜君を呼び出した。

「白夜叉さんはなんんて言つてた？」

「そうだな、実はペルセウスのボンボン坊ちゃんもきてたんだが

つていうわけだ」

「なるほど…：外道だね」

「ああ、外道つつうか下衆だな」

なるほど、当主なんて言うからもつと厳格な人かと思つたら、受け継いだばかりで典型的な甘やかされて育てられた人なわけか。

ていうか黒うさぎさん、自分を犠牲にするのはダメでしょ。それは外出禁止令も出されるよ。

「なら交渉も」

「ダメだった。白夜叉もレティシアの件があつて強気にでれない。ボンボン坊ちゃんは黒うさぎと交換ならいいとか言いやがったが、そんな交渉に乗るわけがない。まさしく八方塞がりつてやつだ」

黒うさぎさんを渡すわけじゃないよね、そうすると交渉もダメと。それならレイシアアさんと話していたアレが使えるかな。ただなるべく時間が欲しい。

「レイシアアさんの身柄はどうなるの」

「明後日にボンボン坊ちゃんがくるんだとよ」

ギリギリなんとかか、移動は白夜叉さんに頼み込めばいけるか。レイシアアさん絡みなら協力してもらえるかも。

「なんとかなるかもしれないって言ったら協力してくれる？」

「なんとかなるのか」

「うん、ただ時間がない。移動しながら詳細を話すけどいいかな」

「OK。場所は？」

「場所はサウザンドアイズ、白夜叉さんに会ってペルセウスしゅさいのギフトゲームの会場に送ってもらうよ」